

# Hello! FUJISEI

No. 325

超高齢社会の日本では、介護は切実な問題です。年老いた人が年老いた家族の介護をする「老老介護」は常態化し、認知症の人が認知症の人を介護する「認認介護」という言葉が生まれるなど、介護のために仕事を辞めたり、介護施設における虐待や介護疲れによる自死などの痛ましい事件も伝えられています。

(公財)生命保険文化センターが3年に1回実施している「平成28年度生活保障に関する調査(速報版)」から、「介護」に関する意識をみてみましょう。

自分が将来要介護状態になった場合の不安の有無をみると、「不安感あり」は90.6%、「不安感なし」は7.4%となっています。

「不安感あり」とした人の具体的な不安の内容をみると、「家族の肉体的・精神的負担」が67.9%と最も高く、以下「公的介護保険だけでは不十分」「家族の経済的負担」「介護サービスの費用がわからない」の順でした。

また、将来親や親族などを介護する立場になった場合の不安の有無は、「不安感あり」81.2%で、自分の介護に対する不安ありと答えた割合を9.4ポイント下回っています。

親などを介護する場合の具体的な

## 介護に対する不安

# 肉体的、精神的、経済的 家族の負担が心配！

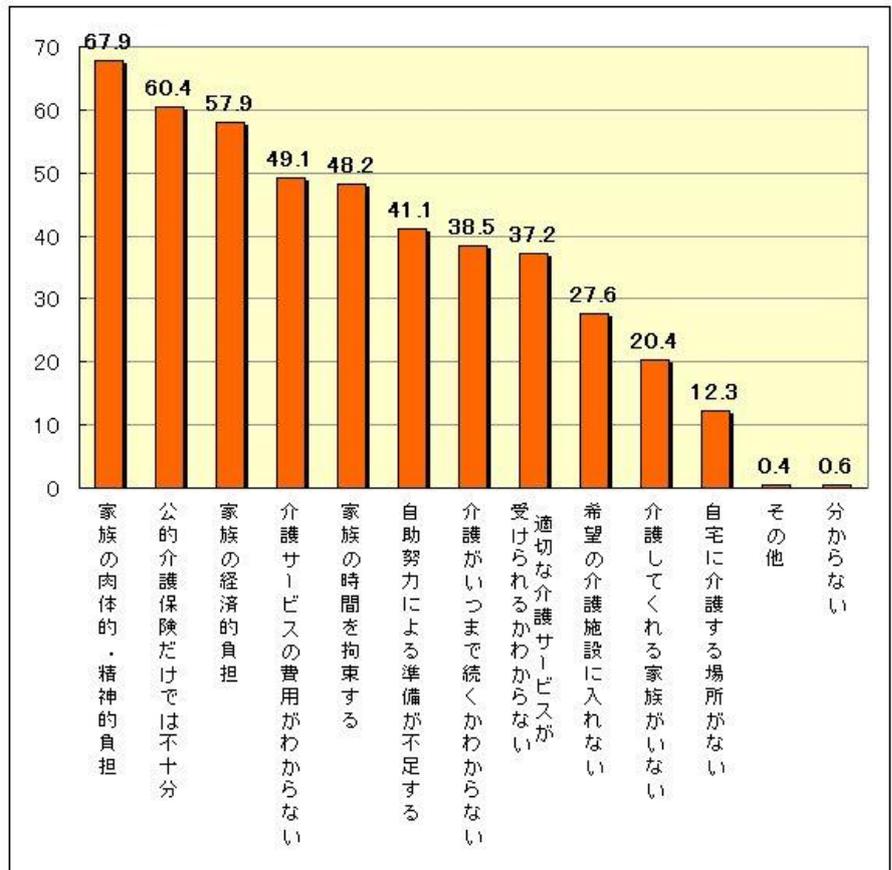
不安の内容は、「自分の肉体的・精神的負担」が67.3%と最も高く、以下「自分の時間が拘束される」(57.6%)、「自分の経済的負担」(52.8%)、「公的介護保険だけでは不十分」(51.3%)の順となっています。

自分の介護に対する不安の内容と比べると、「介護の人手が不足する(介護してくれる家族がいない)」「介護がいつまで続くかわからない」

「自分の時間が拘束される(家族の時間を拘束する)」が特に高く、介護の担い手や時間的要素の不安意識が高くなる傾向がみられます。逆に、「公的介護保険だけでは不十分」は不安意識が低くなっています。

前回と比べると、「希望の介護施設に入れない」が7.1ポイント、「自分の時間が拘束される」が6.1ポイント、それぞれ増加しています。

自分の介護に対する不安の内容 (複数回答、%)



(公財)生命保険文化センター「平成28年度生活保障に関する調査(速報版)」

AIG富士生命保険株式会社

〒105-8633 東京都港区虎ノ門4-3-20  
神谷町MTビル